

# 南会津・一の沢支流ツマジロウ沢～下の沢 ～中門沢～大津岐峠

小沼 充範

■山行年月日:2021年10月8～10日

■メンバー:増田寿代、小沼充範

■コースタイム:

8日 一の沢林道入口 8:30～ツマジロウ沢入口 10:00～稜線 12:30～白沢岳 13:00～下の沢と中門沢の出会い 15:50

9日 設営地 6:30～最後の二俣 10:45～中門岳 14:30～富士見林道 1996m 16:00

10日 設営地 6:30～大津岐峠 9:00～送電線巡視路入口 12:15～一の沢林道入口 13:40

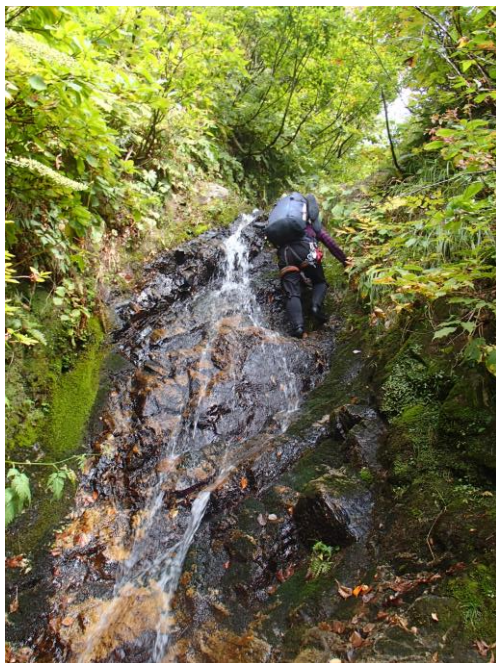
7時、桧枝岐にある道の駅で増田さんと合流し、一台の車で一の沢林道入口へむかう。今回、大津岐の林道は工事に伴う通行規制がなく、8時を過ぎても通行することができる。北側に大きな広場があり、そこに車を止めて8時30分出発。青空が見え、10月とは思えない暖かさである。ブーンと唸り音を鳴らす発電所の建物が目印である。一の沢林道入口には左右に張り出した大きなゲートがあり、右側からトラバースして越えて行く。

林道を歩いて行くと、正面に白沢岳と思われるブナ林の丸い山が見えてくる。林道の右側にある岩場にスズメバチの巣を見かける。10時、取水口のある場所で林道終点となる。沢よりも尾根を上

がった方が近いかなと考えたが、計画どおりツマジロウ沢を遡行することにする。取水口の上流から対岸に渡ると赤テープがあり踏跡がある。藪の中の踏跡をたどるとツマジロウ沢にとびだすことができた。

沢には金属のロープ状の残骸をあちらこちらで見かける。白沢岳北側の1470mピークにはヤグラがあり、それに関係するものなのだろうか。沢はブナ林に囲まれ良い霧囲気である。倒木をかける最初の2m滝が現れる。4段12m滝は右岸から巻いて行く。3m滝は左側を登る。

11時、右岸から枝沢が入る。しばらく進むと、倒木のチョコストーンが現



ツマジロウ沢

れ、倒木を潜り4段5m滝を登ることとなる。7m滝は右側を登り、ブッシュを利用して落ち口に出る。3m滝は増田さんトップで左岸の脆いガレ場から越えて行く。小沼はザックを持ち上げて増田さんに渡し、空身で脆いガレ場から越えて行く。

白沢岳と1470mピークの鞍部に出たいので、左岸に小さな枝沢を見付け、本流を離れ、枝沢をつめる。水量の乏しい枝沢はナメが発達している。振り返ると遠くに平ヶ岳が見える。水量が尽き左側のブナの尾根を登る。ブナの木は太く立派なものである。ブナの葉も少し色づき始めている。

たいした藪漕ぎもなく12時30分、1470m南側の鞍部にたどり着く。東側の眺めが良く三岩岳、窓明山が見えている。このまま下の沢へ下るのかと思った

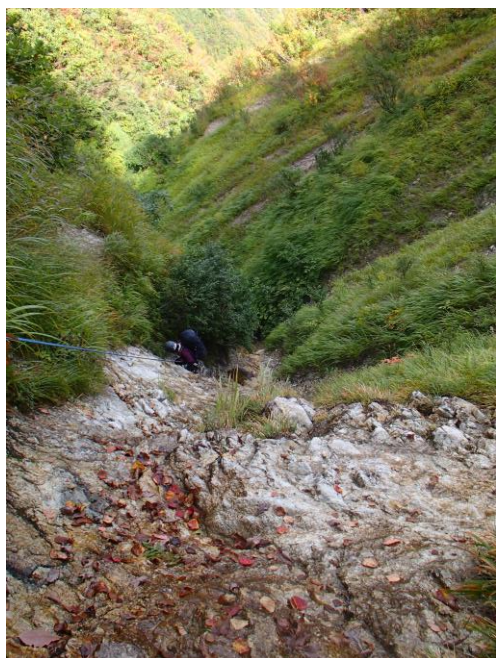
が増田さんが白沢岳へ行くとのこと。小ピークを過ぎ目印となる木の根元にザックを置いて空身で山頂を目指す。

朽ちた倒木にカノシタを見つける。ブナの木には古い切り付けがある。歴史春秋社出版「会津の民俗」によると大津岐には昔、ベテランのマタギがいたそうである。そのマタギの切り付けなのだろうか。歩きやすいブナの斜面も、細かいブッシュを掻き分けて行くようになる。13時、笹藪の中に三角点を見つける。これで白沢岳の山頂は2回目であり、無雪期は初めてである。山頂は木々に囲まれ展望がきかない。

下りは登りと違い、慎重に方向を確認しながら下りて行く。増田さんのナビが助かる。遠くに高幽山を望むことができた。13時35分、ザックのデポ地に到着する。北側へ少し進んでから、下の沢へ



白沢岳北側鞍部より三岩岳を望む



**下の沢 15m滝懸垂**

下りて行く。

小さなルンゼを下って行くと 20mほどのスラブ滝が現れる。ザイルは8mm 30m1本しかない。懸垂でザイルが下まで届くかどうか心配であった。上部はスタンスがあり、少し下って支点を取り懸垂下降することができた。しばらくすると 2 段 15m滝が現れ懸垂下降する。14時 40 分、左岸から大きな支流が入ると 8m2 段「く」の字型の滝となって落水する。3m滝は下部が下りにくく無理をせず懸垂下降する。

右岸から大きな支流が合流すると、その先で7m滝となり、左岸から巻いて下りる。沢は緩やかな流れとなる。3m前後の滝が現れるが容易に下りていくことができる。右岸に青色のビニールシートを見かけると、水量の多い中門沢との合流点である、15時 50 分。中門沢右岸に薪のたくさんある砂地を見つけ、ツエ



**中門沢中間部 15m滝**

ルトを張る。夜はサントリー角瓶を飲みながら、焚火で暖をとる。

10月9日。6時30分出発。今日は昨日と違い、時折小雨がぱらつき、すっきりしない天気である。釜を持つ連暴が続き、3m滝を左から巻く。大きな釜を持つ3m滝を右岸から巻くと、7時10分、左岸から金山沢が入る。ブナ林の広がる平凡な流れとなり、7時40分、左岸からドングリ沢が入る。

中門沢を進むと、沢は狭まり5m滝が現れる。増田さんは滝の左側を登り、小沼は左岸を高巻く。沢は広がりを見せ、8時25分、二俣となり、左俣は1665mへ突き上げる沢であり、右俣は中門沢である。周囲の山肌は紅色や黄色に染まり、秋の気配である。平凡な流れは少しずつ高度を上げていく。沢は狭まり、倒木の掛かる3m滝、倒木を越えると3m滝と手軽に登れる滝が現れる。9時50

分、右岸から 1696mへ突き上げる枝沢が入り、再び沢は広がりを見せる。

ブナの紅葉を楽しみながら遡行すると、10時45分、最後の二俣となり、右俣は5m滝、左俣はナナメ4m滝を掛けており、左俣を選ぶ。ナナメ4m滝は右側のバンドを進み、4m滝を越えると左岸から小さな枝沢が入る。ナメを通過すると、沢はどんどん高度を上げて行く。振り返ると、雲の切れ間から、白石沢スラブ、立倉山が見える。周囲に針葉樹が見られるようになり、標高が高くなったことを知る。

水量も乏しくなり、12時50分、2対1の二俣となり湿地に近そうな右俣を登るが、すぐに笹藪となるので引き返し、沢型のある左俣を登る。沢型もなくなり急な笹藪の登りとなる。右の方に湿地が確認でき笹藪をトラバースして行く。この湿地は増田さんが目に付けていた所である。周囲は遮るものがなく、天気が良いれば展望が良いだろう。

小雨がパラつく中、針葉樹の中の密藪を30分ほど進む。14時30分、中門岳に到着する。あとは登山道を歩いて行くだけである。乳白色のガスの中、黄色に染まる草紅葉が見事である。駒ノ小屋で水を汲もうとしたが、小屋に水場はないとのこと。地糖の水は煮沸すれば使えるので、地糖の水をいただくことにする。

16時、富士見林道 1996m付近の登山道にツェルトを張る。標高が高く、全身濡れているせいもあり、とても寒い。ガスで暖をとり、サントリーオールドのストレートで体を温める。沢で採れたカノシタの炒め物が絶品であった。

10月10日。6時30分出発。大津岐峠目指して登山道を進む。今日は昨日と違い青空が広がっている。会津駒が朝日に染まり輝いている。西には未丈ヶ岳、毛猛連山が見える。南には草紅葉で黄色に色づく斜面の奥に燧ヶ岳、至仏山が見える。雲一つない青空と草紅葉の黄色のコントラストがきれいであり、秋を感じさせる。会津駒へ行くパーティーとすれ違う。

周囲の展望と紅葉を楽しみながら、大津岐峠を通過する。9時、送電線巡視路の入口にたどり着く。南には巡視員専用の小屋がヤグラの上に建っている。道標の裏から笹藪を掻き分けて行くと明瞭な道となり、道は送電線に沿って付けられている。展望が良く、平ヶ岳、越後三山、未丈ヶ岳、村杉岳、浅草岳が見える。さらに下っていくと丸山岳を眺めることができる。



大津又峠巡視道の大正時代の切り付け

途中、美しいブナの大木が点在する場所で休憩する。ブナの木には大正時代の古い切り付けを見る。この道は巡視路だけでなく、大津岐と桧枝岐本村を結ぶ峠道としての役割を果たしていたのだろうか。昨今、人が入っていたようで草刈の痕跡がある。道は地形図の破線と違い、送電線に沿って急な斜面をつづらおりに付けられており、12時15分、大ヨッピー沢にとびだす。巡視路入口を示す道標はなかった。林道を歩き大ヨッピー沢右岸尾根の末端を通過するが、地形図に記されている破線の道は見当たらなかった。

滝沢出合を過ぎた所で、増田さんに待ってもらい、小沼が空身で車を回収に行く。13時40分、一の沢林道にたどり着く。中門沢はブナの原生林の中を流れ、平凡で何もない沢かと思ったが、手軽な

滝登りを楽しめる沢であった。奥只見ダムから長い林道歩きを避け、一の沢から尾根を越えて入渓するルートは、なかなかおもしろい。

田島の図書館に「会津の峠」が置いていない。しかし、他の文献で旧大津岐峠が小ヨッピー沢と赤芝沢の中間尾根であること、送電線の巡視路が大津岐峠の新道であることがわかった。14歳のときに購入した「我が南会津」によると一の沢、大津岐川には当時ダム建設に伴う作業小屋があったらしい。先月遡行した南沢の小屋場沢の記録があるが、読んでみると登山体系で紹介している小屋場沢とは違う沢を遡行しているようである。14歳のときに購入した本を、登山経験をしてあらためて読み返してみると、また違ったおもしろさを知ることができた。